

一の森経塚発掘調査報告

田代孝

一 発掘調査に至る経緯

(1) 発掘調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は、一九八五年四月二一日武田の杜遊歩道を散策中の有賀亮右氏（甲府市国母四丁目）が、一の森山頂において陶器片を採集されたことが契機となつた。推定されている。

陶磁器に関心のあつた有賀氏は、さらに小林真氏（甲府市丸の内一丁目）に鑑定を依頼し、経筒外容器との確認を得られた。また、六月下旬に有賀・小林両氏は一の森山頂の踏査を行い経塚の存在を確認されている。

この経塚発見については、甲府市市史編さん室へも報告され大いに注目されることとなつた。一の森経塚の学術調査の必要性が話題となり、市史編さん委員会（委員長磯貝正義）の考古・古代・中世専門部会によつて発掘調査の準備が進められた。

九月一一日「一の森経塚遺跡」発掘調査の承諾を関係団体、機関へ依頼する（上積翠寺町自治会、下積翠寺町自治会、相川地区自治会連合会、白山神社、甲府営林署）。

一月五日甲府林務事務所より、保安林内作業許可書が送付され

る。

一月一一日文化庁へ埋蔵文化財発掘調査届を提出する。

一二月九日文化庁より甲府市市史編さん委員会委員長へ発掘届の受理通知書が送付される。

準備段階から発掘調査に至るまで、次の機関、団体、個人の方々に多大な御協力を得た。記して感謝したい。

甲府営林署、甲府林務事務所、上積翠寺町自治会、下積翠寺町自治会、相川地区自治会連合会、白山神社、有賀亮右、小林真、武井静次郎、清水正、林周治、林寛吉、山本政雄（敬称略）

(2) 調査組織

調査主体 甲府市市史編さん委員会

調査担当者 磯貝正義（市史編さん委員会委員長）田代孝（市史

編さん専門委員）萩原三男（市史編さん専門委員）

調査参加者 池谷秀樹、井上有史、井上義彦、内田裕一、小池宏

史、高木伸一、中山誠二、原節郎、日向千恵、保坂

裕史、宮沢公雄、八巻与志夫

なお事務局の高木伸也、数野雅彦の両氏には、発掘調査を円滑に進めるために大変な努力をいただいた。厚くお礼を申し上げたい。

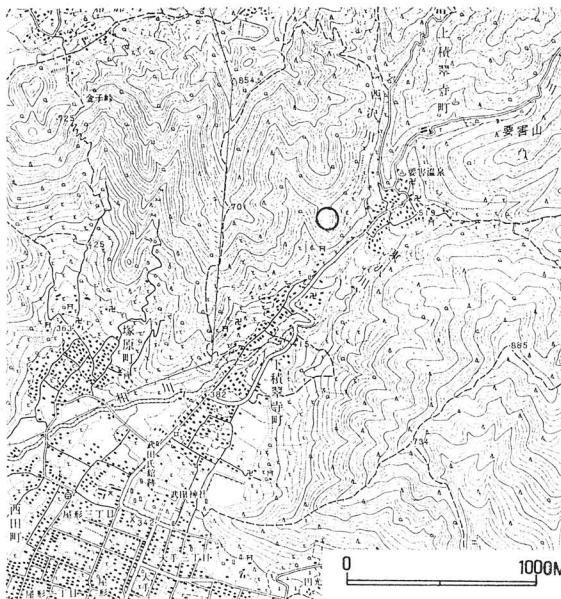
二 遺跡の位置と地理的、歴史的環境

(1) 遺跡の位置

甲府市上積翠寺町一八五番地

(2) 地理的、歴史的環境

一の森経塚遺跡は、武田氏館跡から北東へおよそ一・五kmに位置する通称「一の森」山頂にある。また、一の森の北にのびる尾根上には二の森、三の森が続いている。山頂は標高五七七m、頂部とその南面にはわずかな平坦部がみられる。黒雲母花崗岩の露頭が見られる山頂からは、甲府市街地から



1図 一の森経塚位置図

甲府盆地南部までを望むことができる。山すその県道沿いに白山神社があり、さらに県道に並行するよう相川が南流している。

本遺跡のある積翠寺の地名は、地内の臨済宗寺院、積翠寺によるとされる。戦国期には石水寺郷の名が見えるが、それ以前の歴史は明らかではない。しかし下積翠寺地区の西側に接する塙原地区には疣石塚（いぼいしづか）などの古墳の存在も知られていることから相川の中流域から上流域にかけては古墳時代に遡る人々の生活を考えることができよう。

周辺の遺跡としては、永正一六年（一五一九）武田信虎が築いた躊躇ヶ崎館（武田氏館）や永正一七年に積翠寺丸山に築いた要害城さらには塙原の烽火台などの中世城館跡がある。

三発掘調査

(1) 発掘調査の経過

一九八五年一二月二一日から調査を開始し、翌年の一月七日に終了した。

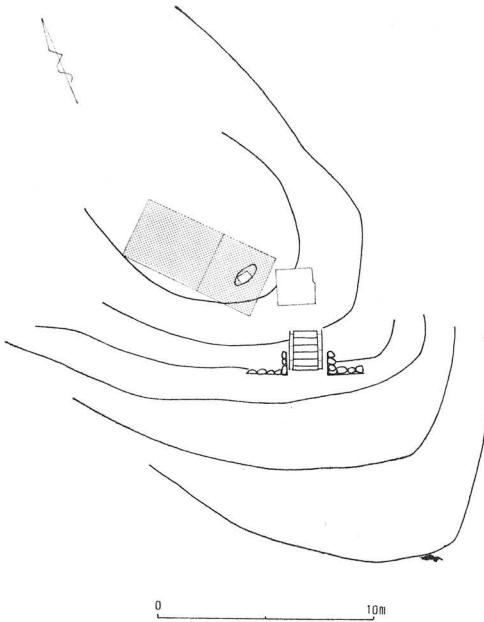
一二月二日 一の森山頂に発掘器材を運び上げる。陶片が採集された山頂部の木製ベンチ付近を中心として三・〇m×六・五mのグリッド（発掘区）を設定する。表土の除去を始める。土層は一層が黒色土層（腐葉土）で厚さ二cm前後、二層は黄褐色土層で花崗岩の露頭の間に堆積した状況であり、平均して七cmほどである。二層下部は花崗岩の岩盤となっていることが確認された。木製ベンチの脚付近の埋め土から陶片を検出し、さらに石祠への奉賽錢と思われる古錢を表土より採集した。

一二月二二日 木製ベンチを移動させ、ベンチ設置の際の二か所

の掘り方を確認し、埋め土を掘り出す。東側の掘り方の壁際において半割された陶製容器と石組が検出された。これを第一経塚としたが、さらにこれより東へ約一・五mの位置で陶片の集中箇所が確認された。

一二月二四日 陶片の集中箇所の精査を行う。この場所が土壤状を呈し、底部に敷石が確認されたことから第二経塚とした。あわせてグリッド全体を掘り下げ遺構確認を行う。

一二月二五日 第二経塚の精査を引きつづき行う。陶片は円筒形および蓋形であり、複数の個体であることが認められた。また鉄製釘や銅板の小破片も検出された。経塚は底部が敷石で壁に石を配したもので、一〇m×〇・八mほどの規模となつた。



2図 一の森経塚調査区全体図

さらに第一経塚の北、約一・〇mの位置で第三経塚を確認する。内部から銅製の飾り金具と思われるものや鉄製釘、および青磁と白磁の小破片が検出された。

一二月二六日 第二、第三経塚の精査を行うと共に写真撮影や実測を進める。さらに遺構確認をつづける。

一九八六年一月六日 積雪の除去を行う。第二経塚に接する東側の表土層直下より陶片が検出された。さらにグリッド東端近くにある石祠付近の遺構確認を行う。写真・実測を進める。

一月七日 地形測量および遺構、グリッドの埋めもどしを進め山頂の現状回復を行う。発掘器材等の撤収を行い発掘調査を終了する。

(2) 遺構と遺物

一の森経塚遺跡の発掘調査によつて、山頂部に設定した調査区より三基の経塚を検出することができた。以下、三基の遺構とその出土遺物及び調査区内一括遺物について述べる。

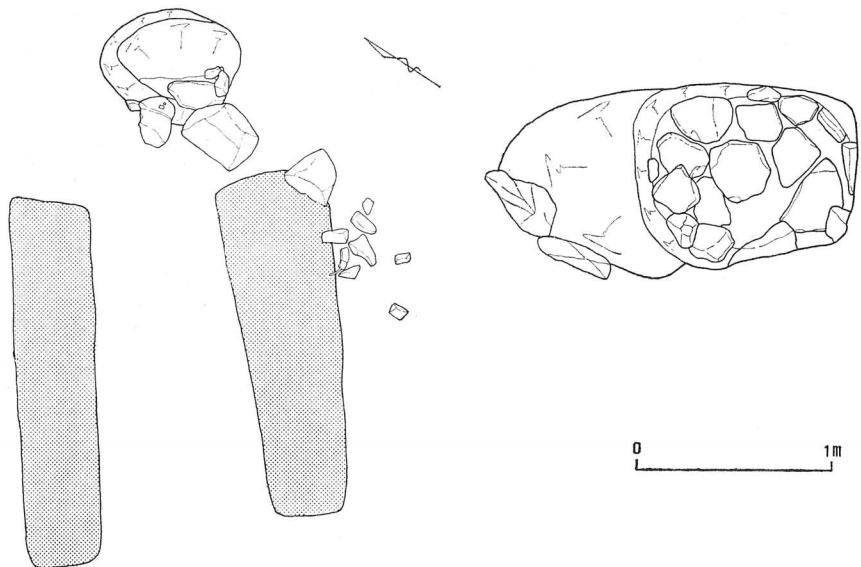
a 第一経塚と出土遺物

第一経塚（5図・6図）

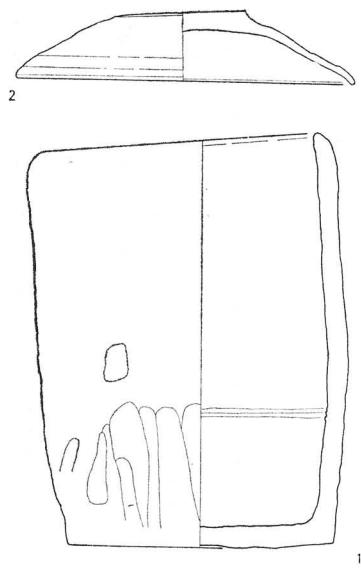
経塚は木製ベンチを移動させ、脚部埋設のための掘削溝を掘り上げた段階で確認された。長さ一・八m、幅〇・五mの二本の掘削溝のうち、東側の溝の壁際である。

壁面の精査によつて陶製容器の半割された状態を検出することができた。円筒形の容器の口縁部には蓋の一部が残されていた。容器の断面の割れ口が新しいことから、溝の埋め土内より出土した陶片や、かつて採集された陶片と同一の個体であることが確認された。

陶製容器の周囲は角柱状の花崗岩が配されており、また一部には花崗岩の岩盤を壁としている。ベンチ設置の際に陶製容器を收めた



3図 一の森経塚全体図



4図 第1経塚出土遺物

石組の埋納施設の半分ほどが破壊されたと推測される。なお経塚に特有の小丘状の高まりなどは確認されず、表土層直下で石組の一部が現れている。また底部には敷石を置いていない。確認面の石組上部から陶製容器が据えられた底部までは約四〇cm、石組の内径は約三〇cmである。

出土遺物(4図)

出土遺物は陶製容器とその蓋が出土している。採集された陶片や埋め土内の陶片を合せて復原するとほぼ完形となつた。

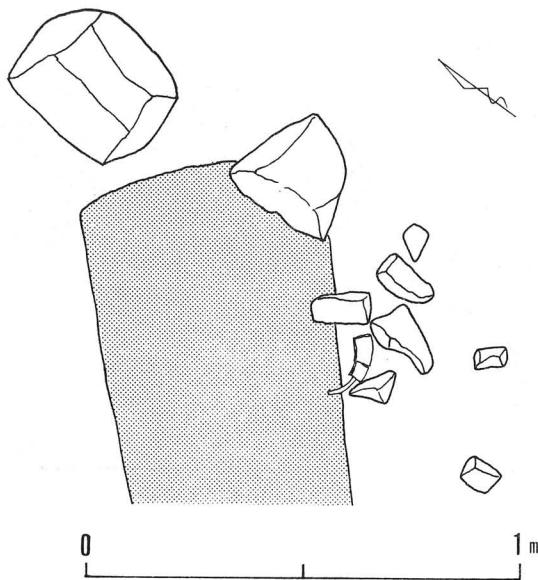
4図1は器高が二三・五cmである。口径は短径一五・〇cm、長径一六・五cmとわずかに不整円形である。口唇部は外面が内反する。器面は内・外面とともに横ナデの調整がみられ、外面の底部近くの一部には縦方向にヘラ削りもみられる。器壁の厚さは一・〇~一・二cmである。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は灰白色であ

る。

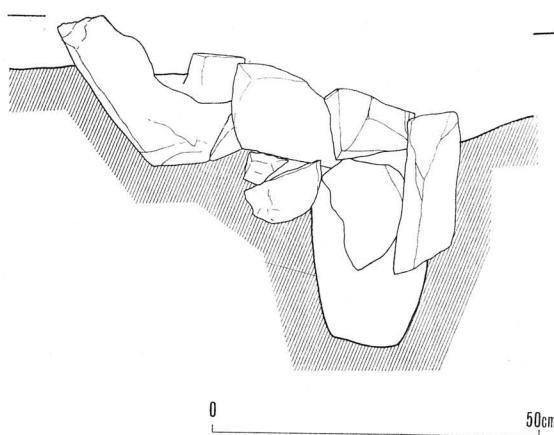
蓋は陶製容器の口縁部に残っていた。

4図2は陶製容器の蓋であり、器形は皿状である。基部径は一九・〇cmである。蓋上部は円形（径七・〇cm）で平らになっている。

製作時の切り離しの乱れをナデによって調整している。内・外面とも横ナデの調整がみられる。器壁の厚さは四・〇mmで、上部で一・一cmとなっていて。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は灰白色である。



5図 第一経塚平面図



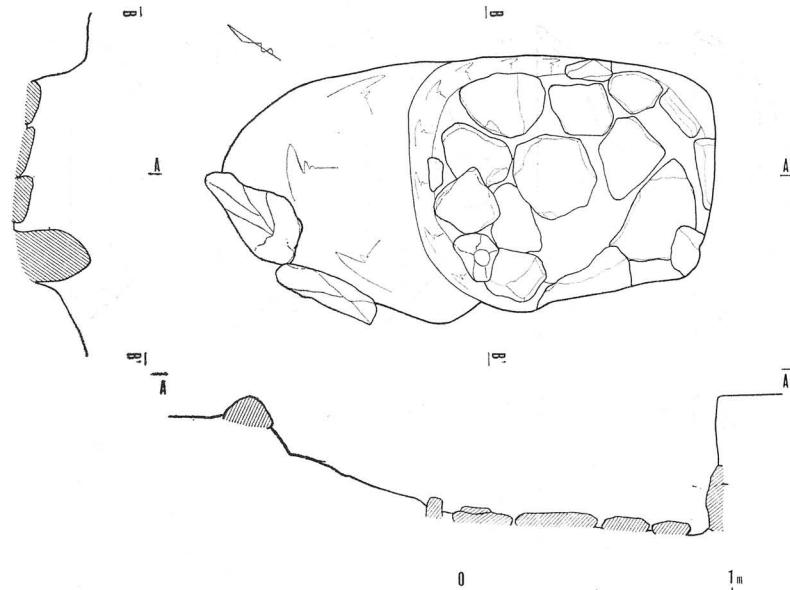
6図 第一経塚セクション図

第一経塚から出土した陶製容器は、その形態から経筒外容器と考えておきたい。また生産窯は渥美窯の可能性を指摘しておきたい。

b 第二経塚と出土遺物

第二経塚（7図）

第一経塚から東へ一・五mの位置で確認された経塚である。長径一・〇m、短径〇・八mで隅丸方形である。深さは地表面から五〇cmである。壁は人頭大の石を据えているが、西側から北側の一部は石組がみられなかった。底部は板状の石を用いて床を作っている。



7図 第二経塚平面図

経塚の上部構造はすでに失われており、表土層直下より陶片などの遺物が出土している状況であった。

出土 遺物（8図・9図・10図・14図）
出土遺物は、陶製容器とその蓋、山茶碗、土師質土器、鉄製釘、銅製板状の小破片がある。陶製容器をはじめとする遺物は多数の破片の状態で出土していることから、ある時期に破壊されたことが推測される。

陶製容器は六個体分が確認された。完形に近いものが一点、半分ほどであるが実測復原ができたものが二点、胴部下半が二点である。8図1は器高二六・〇cm、口径一四・〇cm、底径一六・〇cmである。形態は円筒形であるが、口縁部で強く内反し、口唇部がわずかにたちあがっている。器壁の厚さは胴部で一・八～一・〇cmである。

器面は内・外ともに横ナデによる調整がみられるが、外面の胴部下半の一部には縱方向にもナデがみられる。内・外面の色調は茶褐色であり、断面によれば一・〇mm程度までが茶褐色で、その間は黒色である。胎土は砂質でやや小粒子を含み軟質である。

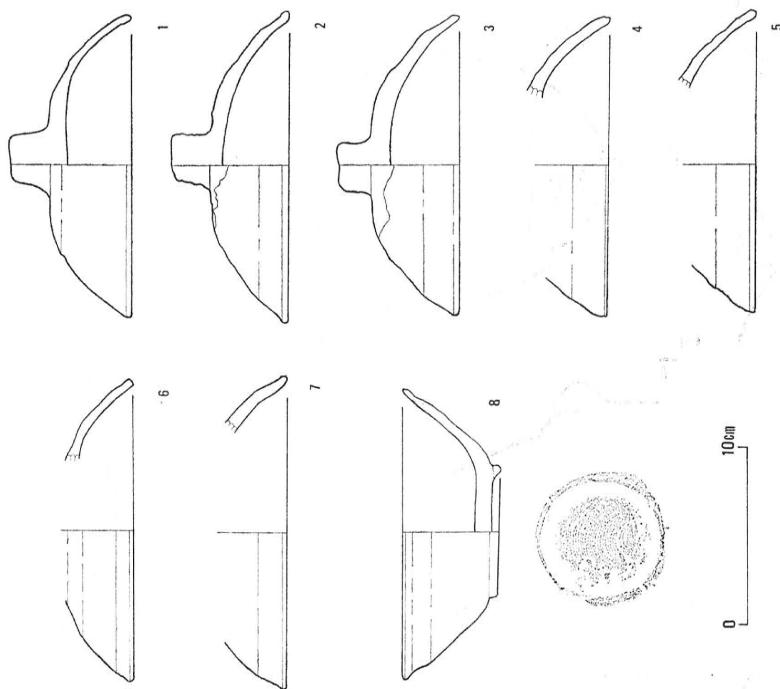
8図2は底部が欠損している。現高二四・〇cm、口径一四・三cm、底径約一六・〇cmである。円筒形で、口縁部が内反する器形である。調整および色調、胎土などは1と同じである。

8図3は半分ほどを復原することができた。器高二六・五cm、口径一五・〇cm、底径約一七・〇cmである。器形、調整、色調、胎土は1と同じである。

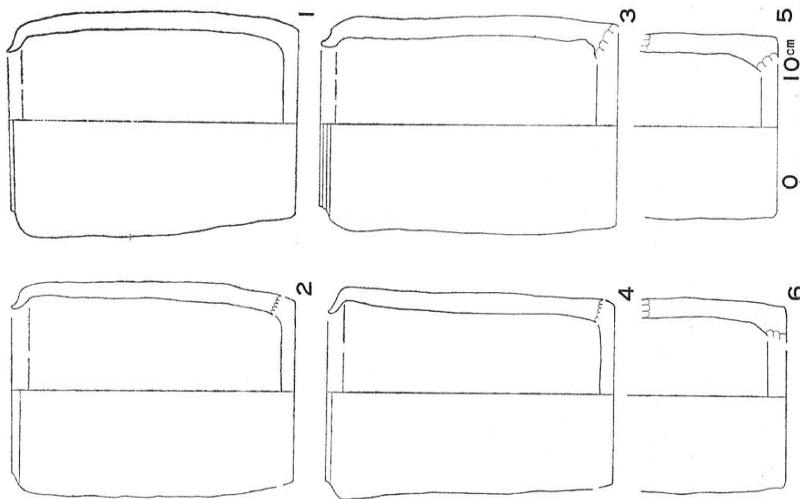
8図4も半分ほどを復原することができた。器高二四・〇cm、口径一五・〇cm、底径約一六・〇cmである。

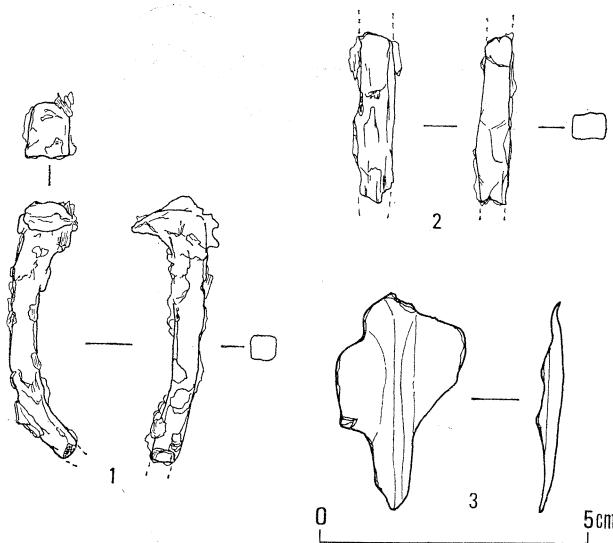
8図5・6とともに胴部下半で、底径約一六・〇cmである。

9図 第二経塚出土遺物 (2)



8図 第二経塚出土遺物 (1)





10図 第二経塚出土遺物 (3)

陶製容器については多量の陶片から六個体分を識別して復原することができたが、接合できなかつた陶片も多い。陶片の検討から発掘以前において失われている部分を認めることができた。また陶製容器は製作技法のうえで同一であると認められるものである。蓋は七個体分が確認されている。ほぼ完形のものが二点、半分のものが三点、三分の一が二点である。

9図1は器高が七・〇cmで、基部径は一六・七cmである。高さ二・

〇cm、径三・〇cmの円柱状のつまみがある。天井部はやや平坦で肩部から縁部にかけて湾曲する。胎土は緻密で、色調は青灰色であり、焼成は良好である。

9図2は器高が六・七cmで、基部径は一七・五cmである。つまみとその周囲にかけて、白色を呈する陶土状のものが塗付されている。つまみの接合部分の補強のためにあらうか。胎土、色調、焼成は1と同じである。

9図3は半分ほどであるが、器高は七・〇cmで基部径は約一六・六cmである。つまみ部分の処理や、胎土、色調、焼成などは2と同じである。

9図4～7は、つまみおよび天井部が欠損している。器高は不明であるが、基部径は一七・〇～一七・五cmである。胎土、色調、焼成については1・2と同じである。

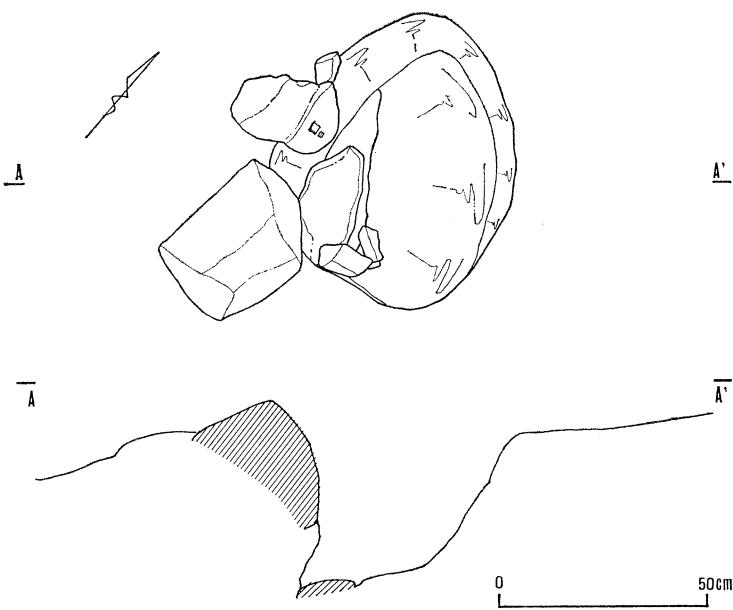
蓋については七個体分が確認されたが、つまみが無いのが五個体分である。このことは陶製容器の遺存状況とも関連して、経塚が破壊された段階に失われたと推測される。

陶製容器と蓋は、本来セットとして存在したはずであるが、陶製容器については渥美窯を推定しておきたい。しかし蓋については他の窯業地の可能性も考えておきたい。

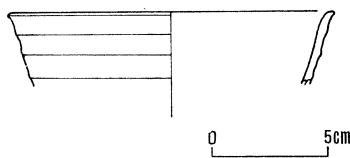
山茶碗は一点である。

9図8は器高が五・四cmで、口径が一六・四cm、高台径は七・五cmである。底部は糸切底であり、付け高台となっている。器形はゆるやかに内湾し、口唇部近くでやや外反する。器面は外面が粗いが、内面は使用痕がみられよく磨耗している。また器面は横ナデによつて調整されている。色調は灰白色で、胎土は緻密であり、焼成は良

好である。なお内面の一部に赤色部分がみられる。時期は一二世紀後半であろう。さらに山茶碗が経塚副納品か、蓋としての転用かは不明である。



11図 第三経塚平面図



12図 第三経塚出土遺物 (11図)

土師質土器の小破片が数点出土している。
14図1は小皿で、底部はやや厚くなっている。一二世紀代の時期が考えられる。

鉄製釘が二本出土している。

10図1・2は断面が方形であり、1は頭部を折り曲げている。2は上・下が欠損する。

これら金属製品についても不明であり、検討課題である。

c 第三経塚と出土遺物

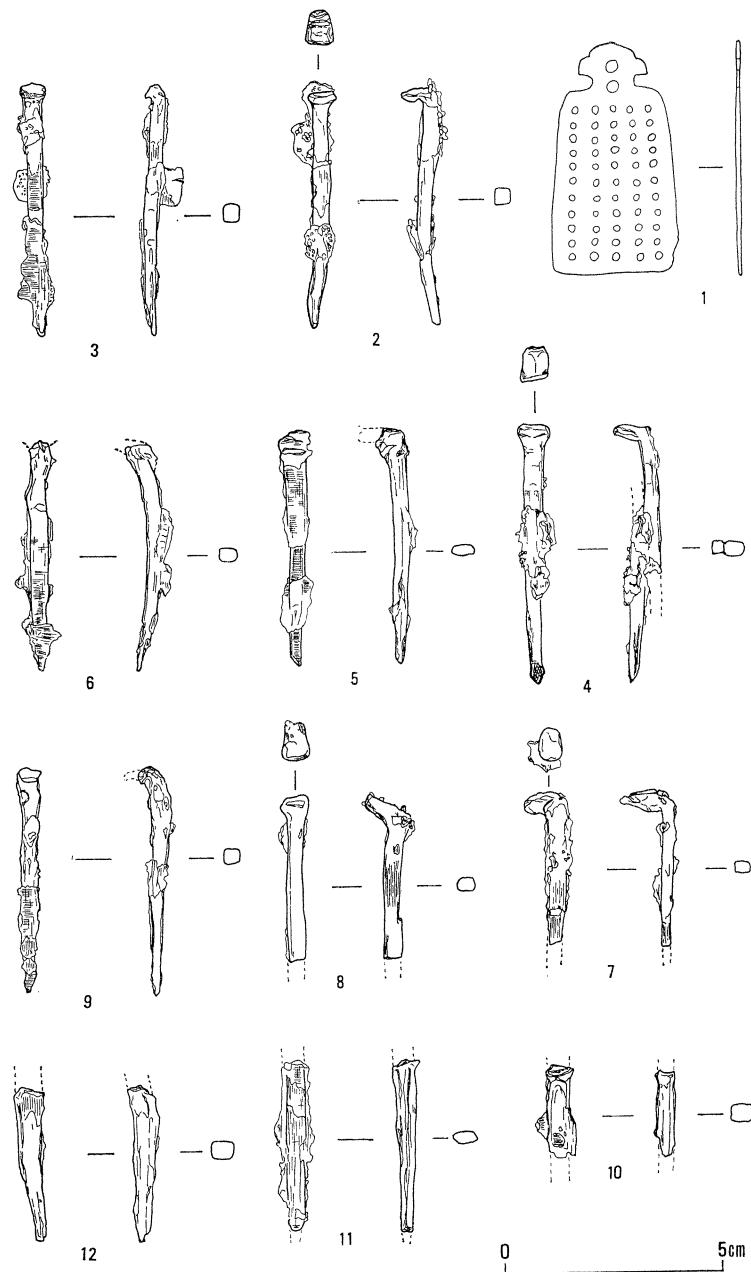
第三経塚 (11図)

第一経塚の北へ約一・〇mの位置に存在した経塚である。花崗岩の三〇cm前後の石の集中が認められた場所であり、それらの石を撤去した段階で確認された。直径六〇cmで円形を呈する。

経塚は岩盤のすき間を利用したものであり、一部は岩盤を壁としているが、南側の一角に角柱状の石が据えられていた。地表面から深さ四〇cmの底部には、板状の石が一枚敷かれていた。内部は石が投げ込まれたような状況であったことから、上部構造を含めて破壊されていたことが推測される。

出土遺物 (12図・13図)

出土遺物は白磁と青磁が各一片ずつ岩盤の壁際で検出されている。さらに

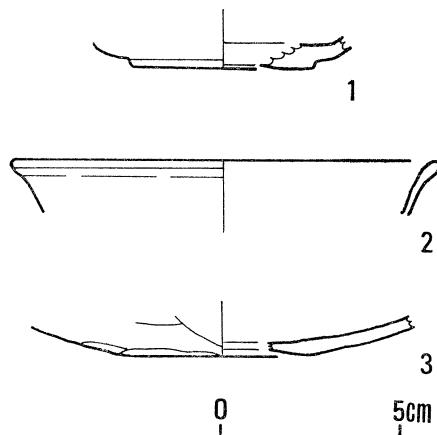


13図 第三経塚出土遺物 (2)

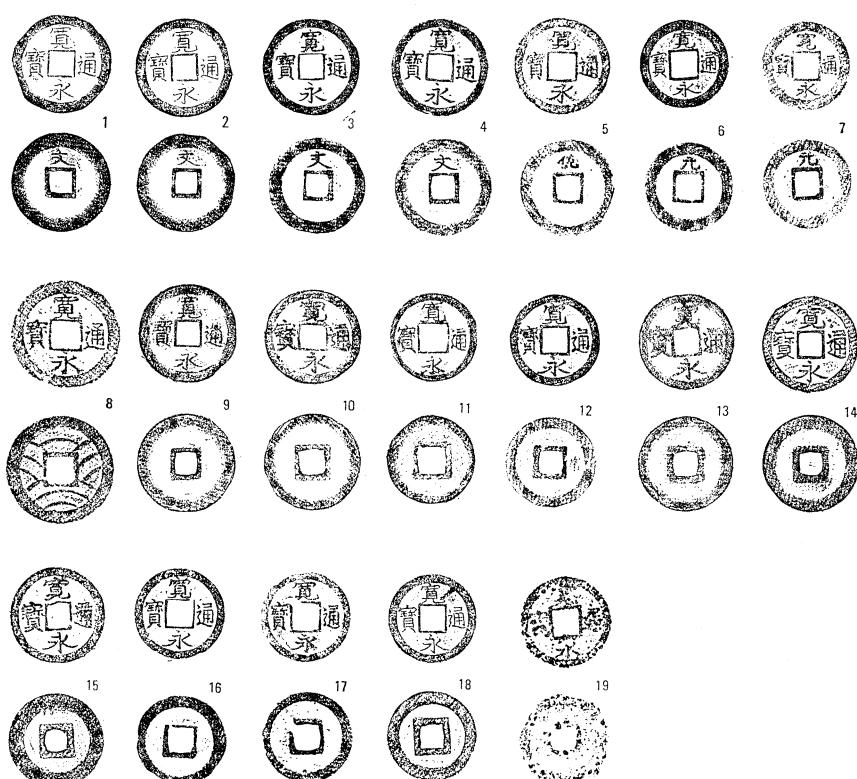
銅製飾り金具や鉄製釘も出土している。
白磁と青磁は各一片ずつ出土している。

12図は白磁の口縁部の小破片である。器形は碗と
考えられる。一二世紀から一三世紀の所産である。
青磁片は実測不能であるが、青磁蓮弁文碗であり、
二三世紀から一四世紀の所産である。

13図1は長さ五・三cm、幅二・八cm、厚さ〇・一
cmである。全面に小孔がみられる。
13図2～12は完形の釘と欠損した釘である。完形
鉄製釘が多数出土している。



14図 調査区一括出土遺物 (1)



15図 調査区一括出土遺物 (2)

の釘は長さ五・五cm、一辺三・〇mmほどの角釘で、頭部は折り曲げてある。一部の釘には木質が付着しているのがみられる。4のみは二本分の釘である。

釘についても埋納品であったのか、または木製品の存在が考えられるのか、検討すべき内容である。

d 一括 遺物 (14図・15図)

調査区の表土中より出土した土師器と古錢がある。

14図2・3は土師器の杯と皿の小破片である。杯は一〇世紀第四半期に位置づけられる。

15図1～19は石祠周辺の表土下及び石祠石組下部より出土したものであり、すべてが寛永通宝である。奉賽錢として用いられたものであろう。19のみが鉄錢で他は銅錢である。

四 発掘調査の成果と考察

一の森経塚の発掘調査によつて三基の経塚が確認された。このことから一の森経塚は経塚群としてとらえることができる。

経塚は一般的には土や石を盛りあげているが、小規模であることや長い間に平坦化が進み、現在では経塚と認めるとは困難である。そのためには偶然の発見が多く、これを契機に経塚の考古学的調査が行われることも多いのである。

一の森経塚もまさにこの例にあてはまるものといえよう。山梨においても柏尾白山平経塚（勝沼町）、雲峰寺経塚（塩山市）、善応寺経塚（白根町）、秋山経塚（甲西町）などが知られているが、これらも偶然の発見とされている。今回の一の森経塚は山梨では初めての考古学調査であることに大きな意義がある。

以下に発掘調査の成果をふまえて、遺構や遺物について検討を試みたい。

(1) 経塚の構造

第一経塚はベンチ設置の折、その半分ほどを破壊されてしまったようであるが、幸い石組の一部を残していた。花崗岩の露頭の際を掘り込み、周囲に石を配した構造である。陶製容器一個体分しか埋納できない規模である。底部は石を置かず、直接陶製容器を据えていた。

なお、盛土、積石および蓋石の状況については不明であった。復原された陶製容器が有蓋で確認されたことは、工事前まで下部構造については発見された可能性もある。しかし陶製容器の復原では、内部に経筒ないし経巻などの痕跡を認めるることはできなかつた。

第二経塚はやはり蓋石や盛土、積石などの上部構造は不明であつたが、石室と呼ぶにふさわしい構造を有した経塚である。一・〇m×〇・八mの規模であり、陶製容器や蓋が六個体分および七個体分出土したが、それらの数の埋納にふさわしいものとなつてゐる。なお第二経塚の位置は、花崗岩の露頭もなく土層としては黄褐色の砂質層である。やや花崗岩の小礫が混在する程度であり、一定の規模の経塚を造営するには適地であつたといえよう。

第三経塚も上部構造は不明であつた。岩盤のやや深くなつたくばみを利用して構築されており、角柱状の石組が一部に残されていだ。さらに底部に板状の石が一枚置かれていた。

以上のことから、三基の経塚は単に土壤を穿つただけの構築ではなく、石室構築を基本としていることが確認された。なお小石室

(第二経塚)としての様相をもつものと、石組(第一・第二経塚)と呼ぶべき様相をもつものとに分けることができる。

石室や石組のある経塚の類例を山梨の中に求めると、康和五年銘経筒の出土で知られる柏尾白山平経塚がある。石室は方形で一・〇m弱で、深さが四〇cm程度のものが六か所あったという。さらに蓋石は一枚石で、四基の石室からは遺物が発見され、二基の石室は空であったといふものである。

一の森経塚や柏尾白山平経塚のように、石室や石組のある経塚は平安から鎌倉時代にかけて多いと指摘されているところである。

(2) 経塚の遺物

経塚石室内から出土した遺物は、陶製容器と蓋を主体とし、その他金属製の遺物がある。

第一経塚の完形になった陶製容器については、経筒外容器(外筒)であり、円筒形の器形は「傘蓋」を含めて、経筒を入れるふさわしいものである。経筒を保護するための間接容器として製作されたものである。経典の埋納にあたって、日常生活品の壺や甕を転用させているのではなく、経塚造営に際して経筒外容器として専用のものを手に入れて埋納していることが知られる。

その生産地は渥美窯の可能性を指摘しておいた。愛知県の渥美半島において一二世紀初頭に開窯した渥美窯は、一般的な日常生活品以外に特殊品とされる経筒外容器なども生産し、各地へ流通させているのである。⁽²⁾

第二経塚の陶製容器も経筒外容器である。円筒形で器壁が厚く、上端部近くで内反して口唇部がたちあがる器形は、他の外容器にはあまり例がないものである。茶褐色でやや軟質的な焼成である外容

器は、あえて類例をあげるならば、渥美窯の短頸壺の口辺部などの技法に関連するであろうか。

蓋はその中心につまみのある「撮蓋」である。須恵質的な色調は外容器と異なり、外見上は一対になるとは思えないほどである。その生産地は今後の検討が必要であろう。なお類似するものとして、沼津市三明寺経塚のものがある。また豊川市財賀町の觀音山出土の経筒外容器は三明寺のものに近似するといふ。⁽⁴⁾

第三経塚からは経筒外容器の出土はなかつたが、輸入陶磁器である白磁と青磁が検出された。青磁は一三世紀から一四世紀の蓮弁文碗であることから、第三経塚の造営時期を鎌倉期におくことができる。青磁は日常生活品というよりも、高級品として扱われ座敷飾りとか社寺の装嚴具に用いられている。また白磁も合子が経塚埋納品によくみられるものであるが、白磁碗も仏具の要素をもつものとして考えておきたい。白磁碗、青磁碗は埋納に際しての供養に用いられたものか、造営者の貴重品であつたものかも知れない。

山茶碗は第二経塚より出土しているが、器形やその口径から経筒外容器への転用であることも考えられる。山茶碗は日常生活品であるが、山梨においては武川村の宮田遺跡の住居址から一点出土している。⁽⁵⁾一三世紀前半代の美濃窯の所産としている。

第一経塚の山茶碗は二例目であるが、渥美窯の製品と考えられ、その時期は一二世紀後半に位置づけられよう。

金属製品は釘が第二・第三経塚より出土しているが、第三経塚の釘には木質部の付着がみられることから、経筒容器で箱形製品のうち木製のものの存在を考えられるかも知れないが、その類例は皆無であり、この釘の性格については不明である。第二経塚の釘は第三

経塚のものよりやや太めである。副納品の一つであるのか、今後の課題である。

また銅製飾り金具については、銅製経筒の傘蓋の周辺から、ガラス玉や金属片を綴つた墻塔を垂下したものがみられるが、これらとの関連が考えられるかも知れない。

第二経塚から出土している銅製板状の小破片は不明である。以上の金属製品のうち、銅製品については、本来経筒外容器に入っていたと思われる銅製経筒の存在を推測させるものである。しかしながら、書写された經典を経筒外容器に直接納めた場合も考えておくべきであろう。

以上、遺構と遺物の検討を試みてきたが、一の森経塚の経塚群の造営時期については、平安時代末期から鎌倉時代末期までと考えられる。第二経塚が石室構造や山茶碗、経筒外容器の蓋などのあり方から、一二世紀後半で鎌倉時代初期に位置づけておきたい。第一経塚については、第二経塚よりやさかのぼるものとしておさえ、第三経塚は中国陶磁の存在から鎌倉時代末期で一四世紀初頭ごろと整理しておきたい。

五 ま と め

一の森経塚の発掘調査は、三基の経塚を確認することができた。発掘によって、山梨においては從来明確でなかった経塚の構造をある程度明らかにすることができたことは大きな成果であった。

経塚は造営以後、ある時期に破壊されて、經典を納めた経筒や副納品が持ち出された状況であつたことが確認された。この結果、経塚の封土や蓋石などのあり方については不明であった。さらに一般

的には存在したであらう銅製経筒（円筒状の容器）も全く検出されず、その器形や銘文から経塚造営の時期や造営者などを知る手がかりは得られなかつた。

ただし、陶製外容器の複数の出土やその他の若干の出土品は、一の森経塚を検討するうえで貴重な資料である。遺構や遺物については前述したが、さらに、二・三の点を述べ、今後の課題などにもふれまとめてみたい。

(1) 経塚の位置について

一の森経塚の位置は、特定の意味をもつ場所であったことが考えられる。南北にのびる尾根上に三つの独立した小山があり、その中でも先端に位置する小山が「一の森」である。花崗岩を基盤とする山頂一帯は低木の松に覆われているが所々に地肌を見せていて。

経塚造営の趣旨から寺院や神社との関連が指摘されているが、さらにいくつかに分類がされている。⁽³⁾ 一に寺院や神社の境内、あるいはその近傍、二に人々が聖なる所、靈地と考えていた所、三に墳墓の近辺、四に周辺より一段と高い見はらしのよい丘陵地、五にどうして選ばれたか特に指摘し得ない所である。この分類に従えば、一の森経塚は南側の山裾に白山神社があり、またみはらしのよい所でもあって、選地の条件の一と四などを満たすものとなつていて。

また社寺境内でも高所が選ばれている例は平安時代に顯著であることが指摘されている。山梨でも特定の社寺からやや離れているが、社寺との関連が考えられ、しかもみはらしのよい所を選んだ例として、康和五年（一一〇三）銘経筒が出土した柏尾白山平経塚がある。⁽⁴⁾ 北東から南西に横たわる尾根の先端で、白山平（標高約五〇〇m）と呼ぶ頂上の南面する緩傾斜地に位置する。山裾で日川と深沢

川が合流しているが、西側にあたる深沢川の対岸には平安時代前期に創建されたと推定される大善寺がある。この柏尾白山平経塚は平安期の経塚造営の好例であり、一の森経塚を理解するうえで重要なである。

一の森経塚の選地にかかわって、出土品のうち注目されるものがあり触れておきたい。調査区一括遺物とした中に土師器の小破片が出土している。実測可能なものから検討したところ、土師器の杯や皿などからその時期が一〇世紀第四半期に位置づけられるものであった。

一の森経塚の造営を一二世紀後半から一四世紀初頭に位置づけて考えてきたところである。のことから土師器と経塚との間に約二〇〇年の差がみられることになる。土師器については出土状況から、その性格は不明といわざるを得ないが、この一の森山頂を平安中期頃に聖地あるいは靈地と考えていた可能性も考えられよう。土師器は供獻用として置かれていたものかも知れない。

近世に入つても山頂の一画に石祠が置かれ、奉賽錢も存在していたことは、古代からの神仰の場としての流れを継承していくことが考えられよう。

一の森の山頂に築かれた経塚の方位は、南北に並ぶものとなつてゐるが、尾根の走る方向と一致している。経塚造営にあたつては、東から南にかけてが重要視されているという指摘がなされている。⁽⁹⁾ 一の森経塚についても、その山頂からは南に甲府盆地とそれを囲む山のみを望むことができる。南に対する方位性を意識していた可能性を一の森経塚造営にあたつて考えてよいかも知れない。

(2) 経塚の造営者について

経塚では、造営者について具体的に知ることができないが、その周辺について考えてみたい。

一の森経塚が造営された時期を平安末期から鎌倉末期と考えているが、平安末期から鎌倉初期とした第二経塚をとおして検討してみたい。まず第二経塚は陶製外容器の出土が蓋の数からでは七点が存在したことが注目される。石室の面積からは、外容器は十点強が埋納できるのである。いずれにしても一基の経塚に複数の外容器の存在は確実であったといえよう。

一般的には書写された經典は法華經であり、經筒内に八巻を納めている。經筒の器形を推定するならば、外容器の蓋は上面が盛り上つていて（盛蓋）ところから、柏尾白山平経塚のうち第六経塚出土の経塚や静岡県沼津市の三明寺経塚出土の經筒にみられる盛蓋つまりの付いたもの（撮蓋）が考えられる。総高約三〇cmの外容器では、經筒の総高約二五cm、口径約一〇mほどまでのものであろう。多數の經典を納めた可能性のある経塚は、その造営にあたつては大きな事業であったことが考えられるのである。經典書写から埋納まではかなりの財力を必要とすることから、一二世紀後半頃には政治的に台頭してきた有力武士層などが、経塚造営の施主として新たに登場してきていることが知られる。

一例として、建久八年（一一九七）銘経筒の出土した秋山経塚がある。⁽¹⁰⁾ 銘文にみられる「源朝臣光經」は施主であり、甲斐源氏加賀美遠光の四男である。なお源頼朝の幕府創建に活躍した小笠原長清

や南部光行とは兄弟である。これらのことから、一の森経塚造営に

ついてもその背景に有力武士層を考えることができよう。

試みに一の森経塚に近い在地領主層を推定してみると、韋崎市、武田に拠つた武田信義の男子たちをあげることができる。甲府盆地北部へ進出して、嫡男忠頼は一条郷（甲府市の中心部）に拠つて、一条小山（現甲府城跡）に居館を設け一条氏を称している。兼信は甲府市東部の板垣莊に拠つて板垣氏を称し、有義は甲府市西部と北部にわたる塩部莊、小松莊に拠つた。なお石禾御厨（石和町）には信光が拠つて、後に武田の惣領職を継いでいる。

この一族のうち、中宮侍長左兵衛尉、塩部右衛門尉ともいわれた武田有義の存在が注目されよう。根拠地となつた塩部莊、小松莊は相川の中・下流域に広がつていたと考えられ、とくに小松莊は一の森経塚の眼下に広がる相川扇状地が含まれていたであろう。

この一族のうち、中宮侍長左兵衛尉、塩部右衛門尉ともいわれた武田有義の存在が注目されよう。根拠地となつた塩部莊、小松莊は相川の中・下流域に広がつていたと考えられ、とくに小松莊は一の森経塚の眼下に広がる相川扇状地が含まれていたであろう。

(3) 経塚と中世陶器について

山梨における中世陶器の出土は、常滑、瀬戸、渥美窯の製品が主体である。これらの陶器が内陸部の甲斐国に搬入されてきたのは平安時代後半のことである。

伝世品であるが富沢町の「藤原顯長、惟宗遠清」銘の短頭壺は渥美窯（大アラコ古窯）であり、すでに紹介した秋山経塚では常滑窯である。また雲峰寺経塚（塩山市）では常滑の三筋壺が用いられてゐる。なお柏尾白山平経塚、善応寺経塚の出土品など検討する必要がある。一の森経塚のものは渥美窯の製品の可能性を述べたが、

さらに明確にすることが重要であると考えている。

山梨において経塚そのものの例が少ないところで一般化していることは十分でないが、東海地方の窯業地との関係がかなり深いことが考えられるのである。

一一世紀初めに始まる経塚造営が、甲斐国にも一二世紀初頭には波及し、それとともに経塚用の容器として陶器が運びこまれてきたのである。山梨における経塚造営は中世陶器との出会いでもあつたといえよう。

また中世陶器が搬入された当初は、日常生活品としてよりも経筒外容器や蔵骨器用として、壺や甕が供給されたのである。これらを必要とし、手に入れることでできた階層は在地領主層などである。

一二世紀初頭には開窯された常滑窯や渥美窯は、一三世紀に入つて瀬戸窯も加えて飛躍的な段階をむかえる。常滑の製品を例にしてみると、北は青森県から南は鹿児島県までの太平洋岸全域に流通している。なお渥美は、愛媛県から岩手県までと常滑より流通範囲は狭いことが知られている。

これらの中世窯業地から各地への搬入は、古代からの官道も用いられたと思われるが、関東平野における常滑の出土遺跡の研究などから、海上および河川を利用した舟運の発達が指摘されている。¹²⁾平安末期から鎌倉時代にかけて、甲斐国に多量に運ばれてきた中世陶器類は、恐らく富士川水系が流通経路の主要なものであつたことが考えられるのである。一の森経塚の出土陶器類もこの経路で入つてきたのだろう。

以上、一の森経塚調査報告のまとめにあたつて、多くの方々にご

教示をいただいた。とくに東京国立博物館の関秀夫、愛知県陶磁資料館の井上喜久男、渥美考古学研究会の小野田勝一、山梨県埋蔵文化財センターの坂本美夫の各氏には出土遺物等についてご指導を賜わった。記して感謝したい。

本報告の執筆は、調査担当者で市史編さん委員会の磯貝正義委員長、萩原三男専門委員の助言を得て、田代孝が行った。実測図、写真などの記録類および出土遺物は、甲府市市史編さん室に保管している。

なお、本年二月一六日、下積翠寺町公会堂において、一の森経塚遺跡の地元説明会を開催した。主催は相川地区自治会連合会（武井静次郎会長）と甲府市市史編さん委員会、出席者は約四〇名であった。

注

- (1) 上野晴朗「山梨県勝沼町柏尾白山発見康和五年銘経筒その他埋納品調査報告」『考古学雑誌』四八一二 一九六二年
(2) 赤羽一郎・小野田勝一編「常滑渥美」『日本陶磁全集』8 一九八一年
(3) 鈴木裕篤「三明寺経塚とその周辺」『沼津市歴史民俗資料館紀要』5 一九八一年
(4) 柴垣勇夫「建久8年書写法華經伴出の経塚出土資料」『愛知県陶磁資料館研究紀要』1 一九八二年
(5) 平野修「宮間田遺跡」武川村教育委員会 一九八六年
(6) 三宅敏之「遺跡と遺構」『新版仏教考古学講座』第6卷 一九八四年

(7) (6) 同じ

(8) 磯貝正義「山梨県勝沼町出土の経筒について」『日本歴史』一七四 一九六二年

(9) 重松敏美「経塚の方位と、その選地の在方」『山岳修驗』創刊号 一九六二年

(10) 上野晴朗「甲斐国発見の鎌倉・室町時代陶器」『甲斐路』三 一九六一年

(11) 清雲俊元他「富沢町徳間発見の「顯長・遠清」銘の短頸壺について」『甲斐路』52 一九八五年

(12) 赤羽一郎「関東平野における中世常滑窯製品の出土分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要』3 一九八四年

参考文献

- ① 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録経塚遺物篇』一 一九六七年
② 菊島(坂本)美夫「秋山経塚出土品」『甲斐考古』一三一 一九七六年
③ 三宅敏之「経塚論攷」一九八三年
④ 関秀夫「経塚遺文」一九八五年
(市史編さん専門委員)

▲一の森経塚遺跡遠景(中央)



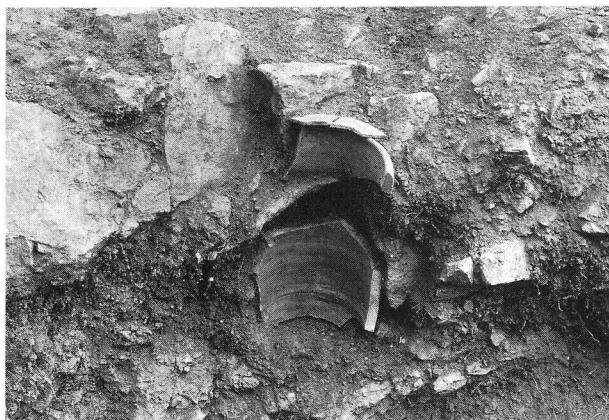
▼調査区(一の森山頂)



▲一の森山頂より眺望した甲府盆地



▲第一経塚遺物出土状況



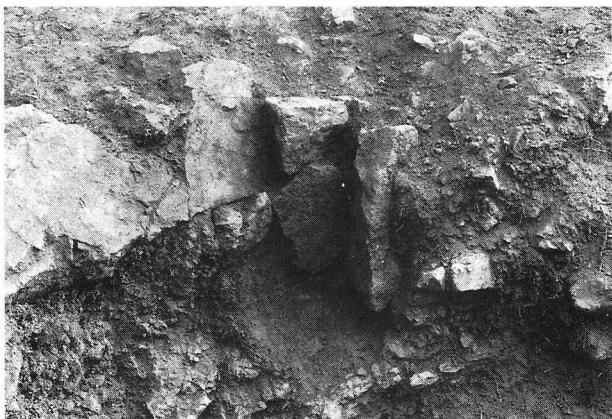
►第二経塚遺物出土状況



▲第三経塚遺物出土状況



◀第一
經塚



▶第二
經塚



◀第三
經塚





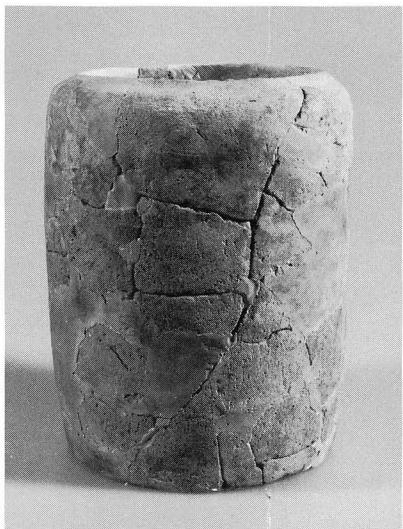
第一経塚出土経筒外容器



第二経塚出土経筒外容器



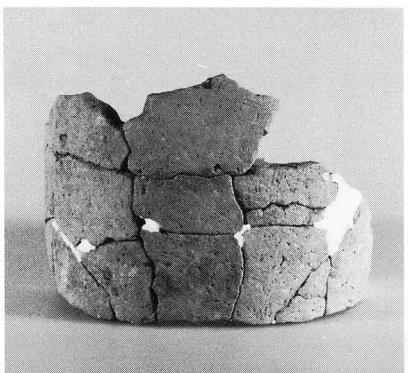
第二経塚出土経筒外容器



第二経塚出土経筒外容器



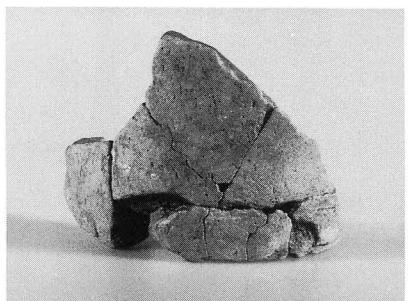
第二経塚出土経筒外容器



第二経塚出土経筒外容器



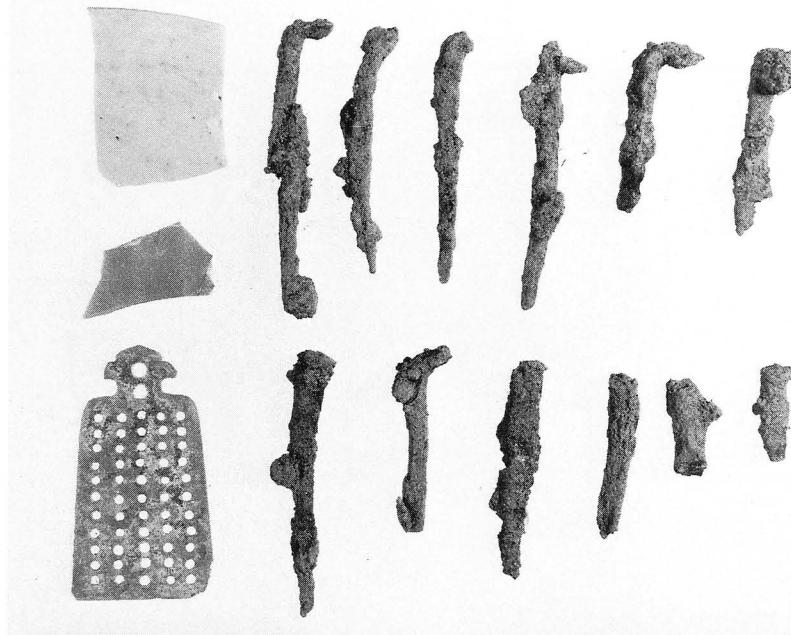
第二経塚出土山茶碗



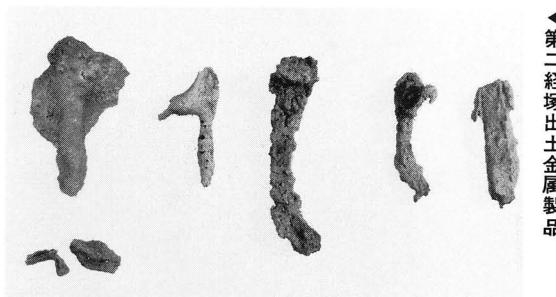
第二経塚出土経筒外容器



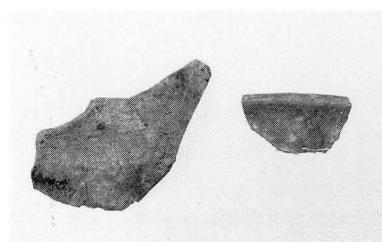
第二経塚出土経筒外容器(蓋)



第三経塚出土遺物(左上 白磁、左中 青磁、左下 銅製飾り金具、他は鉄釘)



▲第二経塚出土金属製品



▲遺構外出土の土師器